

日本経済新聞

がん検診、子が親に勧める 香川県のメッセージカード事業



学校では現在「がん教育」が実施されています。残念ながら広くは知られていませんが、中学と高校では学習指導要領にも明記され、必修化されています。

中学の保健体育の教科書に「身近な大人に向けて、がんに対してどのように行動すればよいかアドバイスを考えてみましょう」という一節を見つけました。がんについて学んだ子どもが、がんを知らない親世代に教える、というわけです。

私のがんの授業を受けた中学生約千人に実施したアンケートの結果を紹介します。授業後、約9割の生徒が「家族にがん検診を勧めようと思う」と回答しました。6カ月後に再度たずねると、約半数の生徒が「親にがん検診を勧めた」と答えていました。

一例が瀬戸内海に面した風光明媚（めいび）な町、香川県の宇多津町です。面積が県内最小の町で、中学校は一つしかありません。町立宇多津中学校の2年生を対象に、2013年からがんの授業を担当してきました。

同町の乳がん検診受診率は、がん教育開始前（12年）は22%でしたが、14年は45%と約2倍に増えました。子宮頸（けい）がん検診の受診率も、12年の31%から14年は50%まで上昇しました。がん教育の導入後に親世代のがん検診受診率が急上昇した例は、埼玉県熊谷市などでも確認されています。

香川県は2026年度、「大切な人へのがん検診メッセージカード事業」を始めました。県指定の研修を修了して認定を受けた「香川県がん検診推進サポーター」が学校に出向き、がん検診の重要性について話します。県はオリジナルのメッセージカードを用意し、子どもたちが記入して家族に手渡せるよう工夫しています。

推進サポーターを通じて児童・生徒のがん検診についての知識や理解を深めると同時に、子どもたちが学んだ内容をメッセージカードで伝えることで、親世代のがん検診受診率の向上をはかる取り組みです。大人にも子どもにもプラスになる素晴らしい活動で、香川のがん検診普及につながることを期待しています。

私は08年以来、全国100カ所以上の学校でがん教育を実施しました。国のがん対策推進協議会でもがん教育の必要性を訴え、文部科学省の「がん教育の在り方に関する検討会」の委員としてがん教育の立ち上げに深く関わりました。

特に、医師やがん経験者ら外部講師の活用を提唱しています。現在、医学生が学校に出向いて授業を行う「医学生によるがん教育推進協会」を立ち上げ、全国で授業を展開中です。最大の特長は学校に費用負担を一切求めない点です。改めて紹介したいと思います。

2026年7月1日